

心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境

4 訓練環境の要因

野口 宗雄 教育科学講座

キーワード 臨床動作法 動作訓練会 訓練効果 訓練環境 心身障害児

はじめに

心理リハビリテーションによる心身障害児に対する長期の訓練の視点から、月例訓練会および宿泊集中訓練会による訓練会の出席・参加と訓練効果の関連(野口 2004a)、訓練環境の検討(野口 2004b)、訓練環境と訓練効果の関連(野口 2004c)によって訓練環境と訓練効果について検討してきた。その結果、訓練効果を最大限に引き出すには子どもが置かれている訓練環境が大きくかかわっていることが示唆された。人間をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとしてみた外界を環境とすると、訓練環境は一定の目標に到達させるための教育的実践活動において、学習者と相互作用を及ぼし合うものとしてみた外界と行うことができる。それは主として社会的環境であるが、障害をもった子どもたちの教育的実践活動の場面では、学習者自身、親、兄弟、祖父母等の家族、先生、友人、訓練仲間、医療従事者(医者、PT、OT、ST等を含む)、学校、施設がその対象になる。

本稿では長期にわたり訓練会に参加している事例を通して、効果的な訓練環境の要因はどのようなものであるかを明らかにするために、効果的な訓練の要因、継続的な訓練実践の要因、訓練効果を維持する要因、学習者の訓練意欲を維持向上させる要因を、学習者、学習の援助者、学習の場について検討する。

内 容

I 効果的な訓練の要因

1 学習者の要因

- ① 乳幼児期
- ② 児童期
- ③ 青年期
- ④ 学校教育終了後

2 学習の援助者の要因

- ① 保護者
- ② 先生
- ③ トレーナー・セラピスト
- ④ 医療従事者

3 学習の場の要因

- ① 家庭
- ② 学校
- ③ 訓練会
- ④ 施設等

II 継続的な訓練実施の要因

1 学習者の要因

2 学習の援助者の要因

- ① 保護者
- ② 先生
- ③ トレーナー・セラピスト
- ④ 医療従事者

3 学習の場の要因

- ① 家庭
- ② 学校
- ③ 訓練会
- ④ 施設等

Ⅲ 訓練効果を維持する要因

- 1 学習者の要因
- 2 学習の援助者の要因
 - ① 保護者
 - ② 先生
 - ③ トレーナー・セラピスト
 - ④ 医療従事者
- 3 学習の場の要因
 - ① 家庭
 - ② 学校
 - ③ 訓練会
 - ④ 施設等

Ⅳ 訓練意欲を維持向上させる要因

- 1 学習者の要因
- 2 学習の援助者の要因
 - ① 保護者
 - ② 先生
 - ③ トレーナー・セラピスト
 - ④ 医療従事者
- 3 学習の場の要因
 - ① 家庭
 - ② 学校
 - ③ 訓練会
 - ④ 施設等

Ⅰ 効果的な訓練の要因

教育的実践活動による訓練を始めるとき、学習者、親、兄弟、祖父母等の家族、訓練仲間、学校、先生、施設、医療従事者のそれぞれがおかれている状況は異なっている。学習者であるトレーナー、学習を援助する立場の保護者、先生、トレーナー等、学校や家庭、施設等の学習の場の要因について検討する。

1 学習者の要因

ある事柄を学習し身につけるには、学習者の発達段階においてもっとも適した時期があり、その時期の学習は後の発達にとって重要な意味があり、その後の段階の発達に影響を与える。身体の動きの学習においても、適切な時期での学習に要した時間や労力と比べ、適期を逸した時期における学習には時間的、労力的に多くを要するだけでなく、時にはその時期での未学習・誤学習が後の時期では取り返しにつかないような事態を起こすこともある。例えば動作の学習においては、誤った力が入ってしまい、自分で自分の身体が思ったように動かせなくなるようなことが起こってくるだけでなく、変形、奇形、異常なカタさ等のような身体的な異常さえ起ってくることもある。

各発達段階において動作の学習にはどのような問題があり、またどのような問題が起ってくるかを乳幼児期、児童期、青年期、学校教育終了後について発達段階的に検討する。

① 乳幼児期

子どもが生まれてから間もなくは身体が小さく、弱く、抵抗力がない。熱を出したり、風邪をひくなどの病気をよくする。体力がないので訓練に耐えられるかの心配も生まれてくる。環境に適合していくにはそれなりの体験が必要となってくる。そのために平素から鍛え、病気にならないように対応しておくことになるが、障害のある子どもの場合はまず生命の維持が最優先で、鍛えるより維持することに主眼が置かれることもある。親は子どもが小さい、弱いという状況に負けないように対策を講じる強い意志や意識をもつことが難しい場合もある。

一般に乳幼児は、自分の問題や課題に対する意識がない、つまり病識がない。自分でできるようにしようとする訓練意欲がない。手足を思ったように動かさない子どもは、訓練の場の認知や態度がまだ

形成されていない。訓練会に参加しても、この場はどのような場で、誰と何をするのかの認識がない。臨床動作法では親と離れて、トレーナーとマン・ツー・マン形式で訓練を行う。訓練場面ではどんなに小さい子どもでも親が同席して行うことはない。母子分離が成立していない子や親から離れて訓練をしたことがない子は泣いてしまったり、力を入れてしまったりで、課題を受け入れられず訓練に入れなような行動が必ず起る。脳性マヒ児の場合は、この時期は身体的に強い力がかたさがなく、他者が動かしたとき、動かないような不当な力が入ってしまっていることは少なく、動かしやすい。しかし自分で動かすことができないこともある。

② 児童期

身体的に強くなり、乳幼児期に起こった問題が解決され、課題に取り組もうとする姿勢が生まれてくる。精神的、身体的に訓練にもっとも取り組みやす時期と思われる。しかし、能動的、主体的に課題に取り組む段階に達していないため、親の訓練会への目的意識が不確かな状態で参加しているような場合は、親の態度が子どもの訓練姿勢に強く影響する。やる気のない子どもの親には迷いがあったり、訓練会に対して全面的な信頼感をもっていないことが見られたりする。

③ 青年期

中学生になると、身体の著しい成長を迎える時期で、前後の児童期・成人期の段階には見られないような身体の成長が見られる。身長が急激に伸び、体重が増え、身体全体が突然大きくなり、性的成長も現れてくる。身体の発達に自己の身体に対して敏感にさせ、身体的特徴の評価に極端に関心を抱かせるようになるが、大きくなったり、強くなった自分の身体機能を思ったように使いこなすことができないことがある。例えば歩きぶりや身のこなしをみると不器用に見えたりすることがある。また、行動をするのに時間がかかったり、ぎこちない動作になったりすることがある。障害をもった子どものなかで、手足を思ったように動かさない脳性マヒ児は、成長し大きくなった身体を思ったように使いこなすことが困難になるだけでなく、成長に伴って身体の歪み、変形、動きの不自由さが目立ってくることもある。従って児童期まで身体的な異常なかたさ等が全くなかったのに、青年期になって急に変形やかたさが現われてくることもある。

④ 学校教育終了後

経験の積み重ねを通して目的意識や意欲を持って訓練に臨めるようになるが、身体的にかたさが強まったり、体重等の増加によって訓練の難しさと結びついてくることもある。

2 援助者の要因

学習者に対する援助者が置かれている立場や状況も様々で、問題や課題も多様である。

① 保護者

障害をもった子どもの親の問題は、子どもが乳幼児期、児童期、青年期、学校教育終了後において起ってくる問題と援助者自身の加齢に伴って起ってくる問題とのかかわりによって多様である。

〈自分の子どもが障害児だと知らされたとき、どのように思ったか、またどのように対応しようと思ひ、そして対応してきたか〉の問いに対して、

母親は、長子が障害をもって生まれてきたとわかったときから、「子どもを外につれ出し、人に見せたり、人の目にさらしたくない、触れさせたくないと思った。」また、次の子どもが障害児だと知らされたときは、「そんなはずはない、何かの間違いではないか」と考えた。与えられた状況をなかなか受け入れられなかった。また、別の親は、「障害児が生まれたと分かったが、他の子どもの世話や父親のために動かないといけない、やらないといけないと思うことが沢山あった。現実を直視しようと思わなかった。事

実を認めるまでには2年くらいかかった」と述べている。

子どもに対する親の態度として、子どものために何でもしてやる。子どもにできるだけ手をかけてやる等の過保護的・溺愛的態度や対応が生まれる。背景には親の不安を消すための行動が見える。「そんなはずはない」とする考えからは、拒否的な態度・対応がなされる。何をしたらよいのか分らず、またそれを知る努力も怠る。指示を受けたときのみ、その場限りの対応をする。訓練会にも参加するが、参加すれば誰かに訓練してもらえることが当たり前と考える（放任）。ゆっくりだがいつか普通になると信じる。母親は、通園、入所等についていろいろな所で言われるままに動くような行動となって現れてくる。

子どもが幼少であるということは、親もその子どもの親になってから時間的にそれほど経過していないことによって、子どもが置かれている状況を正しく理解し、それに適合した対応がかならずしもとれているとは思われないことがある。子どもが障害を持っていることの意味、障害の理解、受け入れ等の認知が曖昧で、ふさわしい対応が分からないでいることがある。経験とはその子に対する対応の経験であるが、親自身も自分が置かれた状況を正確に認知できていない場合である。親がその子どもにふさわしい親になり、いろいろな課題を克服して行かなければならない。子どもが障害児であることを受け入れや的確な認知ができ、ふさわしい態度がとれるようになるには長い時間を必要とする。親の認知や対応が不適切であると、子どもの発達を阻害してしまうこともある。また、子どもの対応を通して親の自己認知と意識の変革が求められることもある。

夫婦の子どもの理解や対応についての話し合い、特に子どもの面倒は母親だけが見るのか、夫婦でみるのかを十分話し合い、決定したのかの問題がある。子どもが幼少の頃は母親だけで対応できることも多いが、年長になると父親に参加してもらわないとやっていけないような事態がやってくる。子どもの養育を母親一人が背負うことがなく、両者が協力してに当たる方向が望ましい。子どもの年齢に関係なく夫婦で当たることが、全てにとって健全である。

② 先生

その子どもにあった障害児教育が保証されているわけでもない。子どもを理解し、力を伸ばすことができない先生もいる。学校や担任の考えや対応を知り、相互理解につとめる。学校や先生と十分な意思の疎通をはかる。

③ トレーナー・セラピスト

初めから経験豊かなトレーナーに担当してもらえる保証はない。現状ではトレーナーを育てていくような積極性が求められる。

④ 医療従事者

施設の治療・訓練方針がある。内容を十分知ってから方針を決めるべきである。

3 学習の場の要因

① 家庭

父母、祖父母4人の家庭環境では、大人が多くいろいろなことをしてもらえが、過保護的な対応になることもある。また祖父母と同居家族で過保護等の無責任な対応がなされると、子どもの成長の邪魔になる。父母のリーダーシップと同一歩調での対応の協力が求められる。

② 学校

就学にあたって障害に対応した教育を保証してもらったが、入学してみると方針が変わり期待していたような教育が受けられなかった。学校の教育方針が変わることもあるようだ。また、学校によっ

ては障害児の教育が十分できないところもある。

③ 訓練会

半日日程の訓練会は行っても益より害の方が多いときがある。中途半端な訓練は子どものためにやっていると思いきも親の不安を払拭することには意味はあるが、努力の割には効果がない。行わない方が得策である。形だけで中身が伴わない、中途半端な訓練や訓練会は意味がない。

④ 施設

入所した施設との意思の疎通を十分はかる。環境の変化による子どもの状態を詳細に観察し、対策を講じる。

Ⅱ 継続的な訓練実践の要因

訓練を初めてから継続して教育的実践活動を行っていく要因として、学習者、援助者、学習の場について検討する。

1 学習者の要因

自分の問題や課題に対する意識がない、自分でできるようにしようとする訓練意欲がない、訓練の場の認知や態度がまだ形成されていない、訓練課題を受け入れようとしない行動等しか示さなかった子どもも、きちっとした対応の訓練を継続することによって課題に主体的に取り組めるようになる。対応が不適切ないし不全の場合は、乳幼児期の子どもがとったような行動が引き続いて起ることがある。訓練会に参加しない、欠席する、午前だけの参加のように訓練が適切になされないことが続くと、緊張が強まったり、訓練に対する抵抗が大きくなり訓練に取り組めないこともある。

親の手に余るほど身体が大きくなった青年期以降になると、入浴介助や移動等に親の体力がもたなくなってくる。大きくなった身体を動かす訓練を続けることは肉体的に難しくなる。母親が子どもの訓練に消極的になる原因の一つが身体的な過重な負担である。サポートをしてくれる人をどのように確保するかが課題となったりする。

2 学習の援助者の要因

①保護者

障害児のある子が生まれたことと、その事実をどのように受け入れたか、事実を事実として受け入れられたかによって、その後の子どもへの対応も多様になる。認知のあり方が対応となって現れてくる。

○母親

「人に子どもを任せることができなかった。訓練会への参加や就学等全てのことを母親だけで決め、夫婦で決めることはなかった。子どもの対応は母親が中心になってやってきた。」

親の無理解、特に母親の理解と感情的受容のなさ、過保護、過干渉、無視、放任の態度については、「年少児で親が今まで子どもにやってきた治療（母子入所）にこだわりがある。キャンプの開催時期と入所が重なるので参加できない。」

「初めて参加したキャンプで、参加の親は施設で一緒にいる親とは違った考えや生き方を持っていることに感心したが、キャンプの内容等は十分理解できなかった。その後2年間の参加はない。」

「初めは母親との参加だった。それは訓練や訓練方法の本質的な理解が不足での参加で、親の不安の低減のための参加であった。人の勧誘・押し売りでの参加でもあり、訓練によって子どもの変化を確認することもなくただ参加していただけだった。」

「子どもがキャンプでやっていけるかの不安がある。」親が耐えられるかの不安の反映でもある。

「母親の方が精神的に訓練会についていけない。」

「3歳頃まではよく病気をした。子どもが弱いと訓練会にも足が遠のく。」

「子どもが小さいから休んでもよいと言う意識がある。」

○父親

「初め父親は全くなにもしなかったが、自分の子どもが預かってもらっているのだからと訓練会の入浴介助を主体的にかかわってくれるようになった。」

「最初自分は仕事についているので、子どものことは母親がやればよいと考えていた。訓練会へも二人の子どもに母親一人がついて行くことを続けてきた。」

「夫婦のコミュニケーションが不十分で、子どもにどのように対応しなければいけないか、ベストの対応や方向はどのようなものかについていつも考えている。母親と一緒に訓練会に参加することにもプレッシャーがかかっている。」

「父親がどこまでかかわったらよいか、関わりかたの判断ができない。家庭の中でどのようにかかわってやったらよいか不安である。」

○両親

「子どもが誕生して以来、子どものことは母親に任せる、全てのことを母親がやればよいとしてきた。それについて不審に思うこともなくまた夫婦で話し合う努力もしてこなかった。」

「夫婦で役割分担をして子どものことは母親がやればよいとして、子どもの世話は母親がしてきた。訓練会参加もできなければやめればよい、今がよければそれでよいのだという考えをもち、子どもの障害の内容や対応の仕方を理解できないでいる。」

「子どものことで夫婦で話がかみ合わない。夫婦の協力関係がうまくいっていない。」

「母親だけの意思で学校の選択や訓練会の参加を決めてきた。子どもの対応で、ある時から自分の取っている方向・行動が妥当であるかどうかの確信が持てなくなった。どれが好ましくて、どれが好ましくないかの判断できないことがある。」

「子どものことを全て母親だけでやってきた結果、今父親の手がないとやっていけないことが起きているので相談しても返事はいつも「母親がやればよい」である。子どもの訓練にも全く理解と協力が無い。夫の気持ちは年老いてきた自分の親の面倒を看る方になってしまっている。」

等々様々な問題が発生してくる。

○家族

「兄が訓練会に参加したことで、障害をもつ姉弟のことを理解してもらえるようになった。」

「父親に十分説明したり、理解を求めないで、協力を無理強いしてきた。」

「次子の誕生とその世話で訓練会に参加できない。この子だけが自分の子どもではない、他の弟妹の世話をしないといけない。姉弟の出生による家庭の事情等で長期に参加できなかった。」

弟や妹は親が訓練会等で障害をもった姉兄だけに関わって、自分たちにはかかわってもらっていないと言うことがある。情緒が不安定になって、もっている力を発揮できないでいることもある。時には家族の中に不登校や不適応行動を示す場合もある。

家族の協力が得られないと嘆くより、普段から家族の協力が得られるような体制作りをしておくべ

きである。訓練会に参加している期間中に姉弟の面倒を見てくれる人がいないときは、平素から相互
互恵の人間関係を築いておくことによって見つかる可能性もある。キャンプのとき姉弟を祖父母が預
かってくれたり、障害をもつ子どもの他の家庭に預かってもらえた例もある。

② 先生

子どもの障害を理解し、適切な対応ができる先生が求められる。

③ トレーナー・セラピスト

訓練課題を受け入れようとしなかった子どもが、継続的な訓練のなかでトレーナーの対応のしかた
によってやる気をだし、主体的に取り組めるようになることがある。トレーナーがトレーニーが自分でや
れるような構えを作ると同時にトレーニーにやれるんだという態度を示すことによって訓練に取り組
めるようになる。

⑤ 医療従事者

役割の実践が求められる。

3 学習の場の要因

① 家庭

親の態度次第で子どもは訓練を一緒にできたり、できなかったりする。

体が大きくなり、それに伴い、歪みも大きくなってきているトレーニーには、月例会の訓練に加え、日々
の生活での訓練の必要性を強く感じる。

② 学校

入学当初は養護・訓練(現在の自立活動)の時間があって訓練をしてもらえたが、その後は訓練の時
間として組み込んでもらえなくなった。学校での訓練の取り組みは一時的なものだった

③ 訓練会

訓練会に不参加や欠席をする場合は、それなりの原因ないしは理由があるはずである。不参加ない
し欠席の理由が子どもの側にあっても、家族などの訓練環境の側にあっても、欠席や不参加の理由が
何であれ、またその理由が他者の賛否にかかわらず、そのことによってもたらされるであろう帰結が
待っている。

休みが多かったり、不定期的に出席する場合には、トレーニーに訓練態度が形成されにくい。形に
入れてトレーナーとやりとりをする中で、課題を受け入れ、理解し、解決に取り組む姿勢が形成され
るので、久しぶりの出席ではいつも初めからのやり直すことになる。年少時の場合はその傾向が顕著
である。課題に取り組めず非効率的である。

④ 施設等

センターに一時入所する。また、中学部入学にともなって自宅通学からセンターに入所して、そこか
ら学校に通う形態をとった。施設と学校では車椅子での生活になり、学校での訓練の時間は減少した。

医療福祉センターに入所した。月例会の開始には間に合わず、2回目の訓練から出席することを2年
間続けてきた。訓練環境の変化で効果が見られなくことがある。

Ⅲ 訓練効果を維持する要因

教育的実践活動を継続し、成果を出し、その成果を継続・持続していく条件としての学習者、援助者、

学習の場について検討する。

1 学習者の要因

訓練が長期間に亘ってなされない場合や子どもが思春期にさしかかって身体の成長が著しくなってきたような場合には、身体に変形や強いかたさが現れてくることがある。月例会に欠席することが多かったり、キャンプにも参加しないで、しばらくの間訓練に本格的に取り組まなかった場合には深刻な状況になることもある。その時期に適切な訓練がなされなかったことによって取り返しのつかないような変化が身体に現れてくる場合がある。脳性マヒ児の場合は、緊張が強くなって自分の力では抜けない、身体に変形や測湾が現れ体つきがかわってしまったり、歪んだ姿勢になることもある。今まで自分でできたはずの動作もできなくなってしまうようなことも起こる。訓練の無さは後にやってくる結果を覚悟しておかなければならないようなことが多い。

2 学習の援助者の要因

① 保護者

子どもが自分で訓練課題に取り組めるためには、身体の健康と情緒の安定が基本となる。家庭ではそのための援助が求められる。

キャンプ中に身内の法事があるという理由で参加しなかった。トレーニーは学習の場が奪われただけでなく、自分の意思に関係なく身体に力が入ってしまい、自力でそれを抜くことができない状態に追い込まれてしまった。参加を希望していたトレーニーの意思に反して、保護者の一時的な感情や気のゆるみによって不参加が決断された例がある。また、訓練環境検討会後に母親の態度が激変し、子どもを受け入れ、家庭でも訓練をするようになって、子どもも自分の身体に主体的に関わろうとするようになった。

継続的な訓練の結果、課題に主体的に取り組めるようになったところに訓練会に参加しなくなることもある。訓練会への不定期的な参加も効果を維持できない。

② 先生

担任と身体の動きに関する学習と自立についての話し合いを行い、学校でも身体の訓練をしてもらえるよう要請した。

③ トレーナー・セラピスト

場の変化によって、できていたことやできつつあった課題が全くできなくなってしまうことがある。環境での対応によって子どもの力が発揮できたり、できなくなってしまうことがある。

④ 医療従事者

施設の都合で訓練の実施が決定されるのではなく、子どもの成長のために持続して訓練ができるような環境が求められる。持続的なケアによって子どもはできることが増える。

3 学習の場の要因

① 家庭

家庭でも母親がトレーナーになって訓練を始めたこと、父親の訓練参加と協力が増えたことで心身ともに安定し、身体のかたさも統制できるようになった。

家庭での訓練のなさによって、訓練会では家庭でもできるような弛緩訓練に終始し、トレーニーにとっての本課題に入れられないこともある。

② 学校

学校と家庭との間の意思の疎通を欠くことによって、子どもの問題に同一歩調で対応できないばかりか、子どもの力を引き出すこともできないような状況もある。

③ 訓練会

訓練会に欠席や不参加であるということは、その時期の一定の期間訓練をしない、できないことになる。その結果子どもが課題に取り組めないで、思っているような成果をあげることは期待できない。訓練会への不定期的な参加では、現状維持が困難な場合や退歩することもある。

④ 施設等

学校や家庭できていたこと、できつつある課題ができなくなることもある。環境での対応が子どもの力を引き出せたり、引き出せなくなる。

「母の出産によって2年続けてキャンプに参加できなかった。更に中学部進学時にあわせてセンターに入所した生活によって、意欲的で活動的になったものの、訓練の機会が減ってしまい、背中 of 歪みと下肢の緊張が強まってしまった。」

長期間の施設への入所や施設の方針で、継続的な訓練ができず身体がかたくなったり、姿勢が歪んでしまうことがある。特に思春期を迎えた身体はその傾向が強い。例えば、移動するのにクラッチを使ってだけで歩行を続けると、移動は可能だが、脚を使うことが少なく、上体に誤った力が入りてしまう。また、移動の手段として車椅子を使う他に、一日中車椅子に乗って生活していることは固定した姿勢を続けることで、背中が曲がり腰が引け、誤った姿勢が身に付いてしまうことがある。

IV 訓練意欲を維持向上させる要因

訓練を初め、継続して教育的実践活動を行い、成果を出し、その成果を継続・持続していく条件として訓練意欲が重視される。訓練に意欲を持って取り組んで行くには、どのような要因が求められるかについて、学習者、学習を援助する立場の人、学習の場のそれぞれについて検討する。

1 学習者の要因

訓練会に参加する年長児の中には、初めからはっきりとした目的や目標をもって参加する者もいるが、年少児の場合は、訓練会に持続的に参加する中で、訓練意欲が醸成されてくるのが一般的である。トレーナーとの関わり、やりとりの中で課題に取り組めるようになってくる。課題が分かるとトレーナーの指示と一緒に身体を動かすようになる。自分の身体のコントロール能力が高まるにつれて意欲的になって、訓練も進歩が見られるようになる。できなかったことが自分でできるようになることによってますます意欲的になる。また、自分で力を抜く、自分で動かす、自分で姿勢をとる等の課題に挑戦しているときは主体的に取り組める。

2 学習の援助者の要因

① 保護者

座れるようになる、膝立ちができるようになる、自分で立ってられる、歩けるようになる等、子どもが動作ができるようになったり、新しい環境に入っても適応できている姿を見て、親は子どもを信じることができ、更にやる気もでてくる。そのことが気持ちのゆとりとなって接する態度が子どもの訓練

意欲を高める作用をする。

親が訓練会の代表になって率先して活動している姿を見せると、子どもも同じようにやる気を出し始めた。親のやる気、活動する姿を子どもの目の前で示すことによって、子どもも一緒にやる気を示す。

○母親

母親がトレーナーになって仲間と家庭で訓練を始め、また父親の参加や協力が増えたこと等によって子どもは情緒的に安定し、訓練に取り組めるようになった。訓練環境検討会後に母親の子どもに対する認知や対応に変化がでて、子どもの訓練意欲の向上につながった。親子訓練や家庭で親が訓練することによって、子どもの気持ちが理解でき、親の気持ちが子どもにも分かってもらえることを期待して行っている。

○父親

訓練会に参加するようになり、家庭でも訓練に取り組むようになった。そのことがトレーナーの訓練課題への集中につながった。

○夫婦

父親が訓練会に参加するようになり、母親の負担が減った。母親は気持ちが楽になり、それまでと違ってゆったりと子どもと向き合えるようになった。

○家族

家族が訓練会に参加して入浴介助等の体験をしてから、家庭での日常生活でも積極的に関わるようになった。

② 先生

子どもをよく観察し、好ましい変化には賞賛する。

③ トレーナー・セラピスト

訓練の目的や目標を明確にし、その都度、何を、どのようにして、どこまで達成したいかを評価する。最終目標(上位目標)を掲げ、その課題の実現に必要な当面の目標(下位目標)をもつ。例えば、立って歩くことを上位目標として設定すると、下位目標は踵を床につける、膝を自在に動かす等が目標になる。スモールステップですすめることでもある。動きたい、立ちたい等の最終目標を掲げることは子どもに動機づけをもたせることになる。訓練において、形の中で課題が分かるように、分かるまで伝えることによって構えと意欲が生まれる。

トレーナーのかかわり方や課題が的確に伝わると泣くことが少なくなり、課題への関わりができた。トレーナーに自分で姿勢を保持するという構えを作ると同時にトレーナーはやれるんだという態度を示すことによって訓練に集中できるようになった。トレーナーが補助の多いかかわりをすると体重を預けてきて、自分で姿勢を保持しようとしなくなる。

自分で弛める訓練を行い始めた頃から少しずつ意欲をもって臨めるようになることがあるが、主動感が持ちやすい訓練課題を行うことも意欲の向上につながる。

③ 医療従事者

障害のある子どもは環境によってできた行動もできなくなる、しようとしなくなることもある。

3 学習の場の要因

① 家庭

親がやる気を失ったり、意欲が減退し怠けて訓練をしなくなったり訓練会に参加しなくなったときに、祖父母等が檄を与えてくれる。

② 学校

小・中学校は地元の学校であったが、養護学校高等部に入学すると同時に寄宿舎での生活が始まった。新しい環境でのびのびとした生活ができ、新しいことに挑戦できるようになった。校長先生がキャンプにいった帰ってくると「姿勢が良くなった」「歩き方がかっこよくなった」等と言ってくれる。いつも自分を見ていてくれる。

③ 訓練会

トレーナーは勿論だが、訓練会全体が訓練意欲が持続できるような配慮をする必要である。訓練会に参加するようになって、初めから泣いたり、抵抗したりして大騒ぎをする。訓練室から勝手にでていってしまう。このような時、トレーナーが前より少しでもやろうとする姿が見られると参加者が拍手し、激励する。みんなの前で挨拶する役割が回ってきたとき、自分の勝手に行動を起こさないでいるときも、行動を起こすまで待ってくれる。できると拍手喝采をして喜んでやる。集団行動がとれないのに、訓練会に参加するのを楽しみにしてやってくる。

④ 施設等

就学や進学、単独入所、寄宿生活等の環境の変化によって、子どもにそれまでの環境とは違った考えが示されたり、違った対応がなされることがある。今まではできたり、せざるを得なかったことが環境が変わることですぐできたことまでできなくなってしまうことがある。

訓練環境の要因と訓練効果

自分の子どもが障害児だと知らされたとき、「悲しい、困った、どうしよう、残念だ」という段階から、自分の子どもにはどのような障害があつて、どのような特徴があるかを理解し、受け入れる。現実を直視し、受け入れるということは、知的理解とともに感情的にも理解できることである。それによって子どものためにどのような対応をしないといけないかが理解できる。しかし、現実を受け止め、的確に対応できるようになるには時間が必要であるし、課題を乗り越えないとならない。どのように対応しなければならないか、子どものためのベストの対応は何かを探ることになる。

保護者が子どもの持続的な訓練を可能にするには、はっきりとした目標や目的と、強い意志と努力が必要である。子どもに対して愛情がなければ続けられない。親はもちろんだが、家族を含め周囲の多くの人々の援助がないと続けられない。訓練への参加が危ういときにも、保護者は参加ができるようにできる限りの努力をすべきである。家族に加えて多くの人々のサポートをえて参加したいものだ。短期間であれば障害のある子どもを母親が一人だけで育て、生活していくことはできるかも知れないが、長期間にわたる場合は一人だけでは対応のできないことが多く発生してくる。そのためには平素から好ましい人間関係を作って、自分たちの周囲の環境を調整しておくことが望まれる。

臨床動作法による訓練で、子どもの訓練意欲を持続させ、訓練効果をうみだすには、他者と形の中でやりとりをすることが求められる。かかわりの中で課題の遂行ができたこと、他者とやれたことが自信となって、他の場面でも生かされるようになる。また、小さいころから他者とのやりとりの経験をもつことによって、この場面ではどのようなことを、どのようにすればよいかの認知が生まれ、他者とのかかわりに対しての構えができてくる。近い将来主体的に、自分で自分の身体を動かすような活動に取り組めるようになる。精神的に成長して他者の援助を得て自分の身体を制御することが可能になる。母親がトレーナーになって訓練を行う場面で、子どもの訓練意欲が醸成されるか否かは、援助者の訓練姿

勢にかかっていく。子どもが「小さいから、かわいそうだから、分からないから」と考えてしまい、かばってしまうと、子どもの持っている芽を摘んでしまうことになる。そのような対応では子どもは自分の課題が分からないし、課題に取り組む姿勢も獲得されることはない。母親が子どもの訓練を行うには、トレーナーとしての態度や条件を身につける努力をすることが求められる。

子どもが今までできなかった動作ができるようになるには、かなりのエネルギーが必要である。「子どもだけががんばればよい」と考え、子ども一人に努力させ、子ども任せにしておいては達成が困難である。また、母親だけががんばっても限界がある。親、トレーナーなどその子の訓練に関わっている者全てが共に協力し、援助し、一緒になって乗り越えるような関係があつて、ようやく新しい動作が獲得できるものだと思う。

子どもたちの置かれている訓練環境を見直して、子どもが課題に集中でき、課題の解決ができるようになるには、その子の訓練環境が整っていることが必要であることが明らかになった。子どもを取り巻く訓練環境中で、とりわけ訓練環境としての家族の対応が子どもの訓練意欲と訓練効果に大きな関わりがある。親は訓練会には休むことなく参加し、子どもに訓練の機会を提供することは最低限の務めで、訓練をトレーナー任せの消極的な参加や対応ではなく、トレーナーと協力して訓練に取り組んでいくような積極的な意識とかかわりを持つことが求められる。また周囲と好ましい関係を構築し、できるだけ質の高いサポートが得られる環境を作る努力も同時に求められる。

トレーナーはトレーニーの訓練に取り組めるよう環境を整えていくことで、訓練会での訓練内容に加え、トレーニーの情緒や親の対応にも触れ、訓練環境全般に気を配る必要がある。

参考文献

- 野口宗雄 2004a 心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境 1. 訓練会出席・参加と訓練効果の関連
信州大学教育学部紀要 第112号 pp157-168
- 野口宗雄 2004b 心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境 2. 訓練環境の検討 信州大学教育学部
紀要 第113号 pp121-132
- 野口宗雄 2004c 心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境 3. 訓練環境と訓練効果の関連 信州大学
教育学部紀要 第114号 印刷中
- 長野リハビリテーション心理学研究 2004 長野県心理リハビリテーション研究会 A4版 全129頁
- 長野県心理リハビリテーション月例会事例報告書 1989 第4巻～2003 第18巻
- 長野県心理リハビリテーションキャンプ事例報告書 1990 第5巻～2003 第18巻
- 長野県心理リハビリテーション第1回訓練環境検討会報告書 2001
- 長野県心理リハビリテーション第2回訓練環境検討会報告書 2004

(2004年12月15日 受理)